

私たちは、これまでに「約束」「信仰」「悔い改め」「赦し」による「信仰の継承」ということを見てきました。それらが正しいことかどうか、つまり、主の御心になつたものであるかは、どのようにして知ることができるのでしょうか？それは、みことばによります。私たちは、みことばを通して、この救いが主の約束によること、そして、それがその約束を信じるすべての人に与えられるものであることを知ることができるのです。主の約束とは、主イエス・キリストによる祝福であると見ましたが、それは実に主への悔い改めによって罪赦され、神の子どもとされた人に与えられる永遠のいのち、天の御国の相続ということができます。

ですから、主イエスにこの救いの望みを置く私たち、またこの福音（良い知らせ）を他の人々に届ける私たちは、常にみことばに聴く必要があるのです。これらのことを、みことばを通して知り、また知った後も、いつでもみことばによって思い起こすことで、私たちの焦点がずれることのないためです。そのことを覚えつつ、今日の箇所を見ていきたいと思ひます。

このテモテへの第二の手紙は、パウロが書き残した最後の手紙だといわれています。今日の箇所のすぐ後のところからもわかるように、この時パウロは、自分が世を去ること、つまり、自分の死が近いことを悟ることで、同じく伝道者であり、愛する弟子のテモテに、この手紙を書き送りました。ですから、直接的にはテモテに宛てて書かれたのです。ただその内容において、それが牧師や長老に当てはまることから、さらには彼らを通してみことばの教えを受けるすべての信仰者たちに当てはまることから、それが今日の私たちにも語られていることであると受け止めることができます。そして、そのことは他の聖書においてもそうなわけです。

1節「神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思って、私はおごそかに命じます」。パウロがその生涯において、特に主イエスのあわれみを受けて回心へと導かれた後、彼が最も大切なこととしていたのは、主のみことばと御霊の助けによって、主に受け入れられる歩み、つまり、主に喜ばれる歩みをするというものでした。ですから、パウロは、誰か他の人の目ではなく、主の目にかなうことを常に求め、主の御前で歩みに励んだのです。

「主の現れ」とは、主の再臨のことですが、その時、主は生きている人と死んだ人、つまり、すべての人をさばかれます。ご自分を愛し、その御声に聴き従った人を、主は天の御国に迎え入れ、主を拒み、自分の心の欲するままに歩んだ人を、主は火の燃える地獄へと投げ込まれるのです。そして、そのさばきの対象とならない人はひとりもいません。すべての人が、神様のさばきの座につくことになるのです。そのことを思いつつ、パウロは、この後に続くことをテモテに命じています。

2-4節「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです」。

「時が良くても悪くても」とは、その続きからして、「人々がみことばに耳を傾ける時も、耳を貸そうとしない時も」と理解することができます。そして、今の時代が、まさにパウロがここで語っている「人々が健全な教えに耳を貸そうとしない」時代といえるでしょう。なぜなら、自分を信仰者という人の中にも、聖書を通して語られていることではなく、自分自身やこの世の考えをもってきて、それを健全な教えかのように主張する人が少なくないからです。つまり、みことばによって自分を変えられるのではなく、それを自分のつごうの良いように利用する人が実に多くいるからです。

そのような時代にあつて、みことばを宣べ伝えるには、何よりもまず自分自身がみことばによる教えを受けることで、責め、戒め、勧められることが必要です。そして、その霊的成長の過程において、主が私たちに対して寛容であつて下さるように、私たちもまた他者にみことばを語る時、寛容を尽くすことが求められる、つまり、忍耐が問われるのです。なぜなら、繰り返しになりますが、みことばに教えられるとは、お勧めだけでなく、責め、戒めが伴うことだからです。

皆さんは、責められ、戒められることが好きですか？自分の罪、自己中心さ、愚かさ、汚れ、間違いや過ちを指摘され、責められ、正されることを自分から願う、という人がいるのでしょうか？いないと思います。でも、みことばを通して健全な教えを受け、それによって責め、戒め、勧めを受けるなら、私たちは主に似た者、つまり、聖なる者へと造り変えられていくのです。なぜなら、自分の罪、その大きさが示されるところでは、主の恵みもまたいよいよ増し加えられるからです。

実に主イエスは、そのためにこの世に来て下さいました。私たちには誰一人として成し遂げることのできなかった神様の御前での完全な歩みを、主イエスが代わりに全うして下さいることで、また、私たちの罪に対する代価を、ご自分が十字架にかかり、その死をもって支払って下さったことで、主は私たち罪人を滅びから贖い出して下さったのです。この神の御子、救い主イエスのゆえに、またその恵みによって、彼を信じるすべての人は、罪の赦しを受けているだけではなく、神様に喜ばれる完全な者として、義なる者とされているのです。

この救いの意味、そのすばらしさを知る時、私たちは、みことばによって責め、戒め、勧められることが、神様からのさばきではなく、恵みとして受けとめることができるようになります。なぜなら、主はそうすることで、私たちをいよいよご自分の許へと近づけ、ご自身の御霊とその御声に導かれて歩むことの幸い、その喜びを味わい知らせて下さるからです。ですから、私たちとしては、そのような主の恵みに対して渴きを覚えている人が大勢いることを、みことばを宣べ伝える理由として考えたいと思うのです。

ところが、パウロがここで言っている理由は、むしろ、その反対ということができます。つまり、「人々は、健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になる」ゆえに、パウロは時が良くても悪くても、みことばを宣べ伝えなさいというのです。ここで彼のいう「人々」とは、誰のことですか？それは教会の外、つまり、この世の人々のことですか？いいえ。それは教会の中、つまり、信仰を告白する人々のことです。というのも、この世の人々は、もともとみことばに対して耳を傾けていないからです。そして、そのことはこの手紙の三章からもわかります。

Ⅱテモ 3:1-5「終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。2 そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、3 情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、4 裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、5 見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい」。

ここのリストの初めは「自分を愛する者」、またその終わりは「神よりも快樂を愛する者」となっています。つまり、ここで語られている人々とは、神ではなく、自分を愛するゆえに、金を愛し、大言壮語をし、不遜で、神をけがし、両親に従わず、感謝することを知らず、汚れた者となり、情け知らずで、和解せず、そしる者、節制がなく、粗暴で、善を好まず、裏切り、向こう見ずで、慢心で、神よりも快樂を愛する者となるのです。ただ、彼らは見えるところは敬虔、つまり、信心深く、神を敬う者であるかのように見るとパウロは言います。外見では見分けるのが難しいということです。

ただ彼らは敬虔の中身、つまり、みことばが指し示すところの主イエス・キリストとその福音を不定する者です。なぜなら、自分を愛すること、神様よりも快樂を愛すること、それこそが自己中心、罪だからです。もし、そのことがみことばの（健全な）教えによって示されるなら、そこからの救いを求めずにはいられなくなるはず、主イエスにすがらずにはおられなくなるはずです。でも、そこで健全な教えが語られることがなければ、つまり、みことばによって勧めがなされるだけでなく、その間違いや過ちを責められ、戒められることがなければ、どうなりますか？彼らは自分の本当の姿、罪人としての姿を悟ることができない、それゆえに主イエスによって罪の赦しを受けることなく、自分の罪の中で死と滅びを迎えるのです。

そのようなことを主イエスが望んでおられると思いますか？もちろん主は、だれ一人として滅びに至ることを望まれないのです。だからこそ、自ら十字架の苦難の道を歩み、その死をもって私たち罪人が信じるだけで赦される道、救われる道を備えて下さったのです。そして、三日目に死人の中からよみがえられることで、ご自

分が神の御子、救い主であることを証され、信じるすべての人に永遠のいのちを約束して下さっています。パウロは、この福音を誰よりも深く味わい知る者であるゆえに、彼自身、いのちをかけてみことばを宣べ伝え、また弟子のテモテを始め、すべて主の救いにあずかった者にも、みことばを宣べ伝えることを命じているのです。Ⅱテモ 3:15にあるように、「…聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができる」からです。

どうぞ考えて見て下さい。皆さん、あなたは聖書の主張する「義人はいない。ひとりもない」という真理を信じていますか？あなたを含む、すべての人が神様の前に罪人であることを認めておられるでしょうか？もしそうであるなら、その罪人にみことばが語られても、そこに勧め以外に、責めや戒めがないとしたら、何かおかしいと思いませんか？みことばは、私たちが主イエスとその救いへと導いてくれるゆえに、そういう意味において、罪人の私たちにとって耳障りの良い、都合のよいものということができます。でも、そこで罪が責められることなく、主の十字架の必要性も語られることがなければ、当然、主への愛と信頼が増すこともないのです。その場合は、健全な教えが語られていないか、それを受ける人に聴く耳がないかのどちらかです。

パウロはこの手紙の最初の方でこのように語っています。Ⅱテモ 1:12「そのために、私はこのような苦しみにも会っています。しかし、私はそれを恥とは思っていません。というのは、私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです」。福音のために、パウロがどれだけの苦しみと試練の中を通過して来たかは、使徒の働きを通してすでに学んだ次第です。では、どうですか？あなたは、このパウロのように言うことができますか？

この世におけるあらゆる試練や苦難の中でも、それをただ災いや呪いとしてではなく、そのようなところからも主はご自身の栄光を現わされること、また「主は必ず自分を救って下さる。救いを完成して下さる。だから大丈夫！」という確信をもつことができるのは、実に主との信頼関係、愛の関係によります。そして、そのような関係は、何よりもみことばによって築き上げられるものです。私たちはこの主との関係とその福音によって生かされるため、またそれが他の人々にも届けられるために、みことばを宣べ伝えなくてははいけません。時が良くても悪くても、自分自身に、信仰の家族に、それをまだ聞いたことのない人々に、日々語り続ける必要があるのです。

信仰の継承は、そのようにみことばが宣べ伝えられることを通してなされていきます。そして、その際に心に留めたいこと、それはみことばを宣べ伝える人の背後には、他の人々がいるということです。パウロはテモテにこう命じています。Ⅱテモ 2:1-2「そこで、わが子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。2 多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい」。パウロは、自分の教えがテモテを通して、他の人にゆだねられるだけでなく、テモテからそれを受けた人が、さらに他の人を教えることを期待しています。

そのようにしてみことばが人々に宣べ伝えられることを考えるなら、また、そのようにして信仰の継承がなされていくと考えるなら、一人の人にみことばが語られることは決して小さなことではないのです。あなたを通してみことばが語られるなら、その人から他の人へ、またさらに他の人へと、みことばは宣べ伝えられていきます。今日、主があなたにみことばを語るようにと示しておられる人は誰ですか？あなたを通してでなければ、主の福音を聞くことのできない人が必ずいるはずです。主は、そのためにあなたを遣わしておられるのです。みことばを宣べ伝えようではありませんか。